

24 弟子は師にまさるものではなく、僕は主人にまさるものではない。25 弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である。(家の主人がペルゼブルと言われるのなら、その家族の者はもっとひどく言われることだろう。)」

ある人といっしょに旅をして、その相手と旅することがとても快適だと思ったら、その人は、あなたの師である。その相手と旅することが苦痛で忍耐を要するものならば、その旅はあなたの修行である。

マタイによる福音書では、「弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分だ」と言います。しかしルカによる福音書は、6・40でこういいます、「弟子は師にまさるものではない。しかし、だれでも、十分に修行を積めば、その師のようになれる」と。

26 「人々を恐れてはならない。覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである。27 わたしが暗闇でああなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。28 体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れるな。」

師(イエス)のようになるといふことは、イエスがそう

であるように人を恐れない人間になるといふことです。師とは人格の成長を遂げた人であるといえますが、人の成長を妨げるおおきな要因の一つは、人間を恐れることでしょう。ところがだれしも人からの評価を気にせずにはいられません。また、人から不評を買ってしまうことを恐れます。

「ひとびとを恐れてはならない」と戒める背景には、当時のキリスト教への迫害があることが知られています。「恐れてはならない」との根拠について、マタイは、「覆われているもので現されないものではなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである」と言います。この言葉は信仰の本質を言い当ていると思われまます。なぜなら信仰が、自分の意志であるなら、自分の意志で覆い隠すことができるはず。そして「覆われているもの」「隠されているもの」は信仰なのです。

信仰とは、神の呼びかけに答えて、自分の存在すべてを神にかける決断を意味します。なにゆえに神に対して自分の命、生き方を委ねることができるのでしょうか?できたのでしょうか?

29 二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その二羽さえ、あなたがたの父のお許しが必要ならば、地に落ちることはない。30 あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。31 だから、恐れるな。あなたがたは、たくさん雀よりもはるかに大事なものである。」

マタイは次のように続けます。「二羽の雀が一アサリオンで売られている。だが、その二羽さえ、あなたがたの父のお

許しが必要ならば、地に落ちることはない」と。

詩 124・6 主をたたえよ。主はわたしたちを敵の餌食になさらなかった。7 仕掛けられた網から逃れる鳥のように、わたしたちの魂は逃れ出た。網は破られ、わたしたちは逃れ出た。

敵に捕らえられようとしているひとびとが、逃れる鳥のように逃亡したのです。あるいは、髪の毛一本にしても、すべて数えられているのです。髪の毛とは

詩 40・12 主よ、あなたも憐れみの心を閉ざすことなく、慈しみとまことによつて、いつもわたしをお守りください。13 悪はわたしにからみつき、数えきれません。わたしは自分の罪に捕えられ、何も見えなくなりました。その数は髪の毛よりも多く、わたしは心挫けています。

詩 69・5 理由もなくわたしを憎む者は、この頭の髪よりも数多く、いわれなくわたしに敵意を抱く者滅ぼそうとする者は力を増して行きます。わたしは自分が奪わなかったものすら、償わねばなりません。

すなわち数え切れないほどの髪の毛、悪行の一つ一つ、敵のひとりひとりを神が知っておられる。そのような悪、敵から神は慈しみと真理をもって守ってくださるのである。

しかしながら、もしもいわれなき迫害に対してわたしたちが無防備であったなら、どうでしょうか。わたしたちは不条理を無防備であることによつて、犠牲者となり、身体に、

あるいは精神に深い傷を被るでしょう。迫害という組織・集団的な悪に対抗して組織や集団をつくって抵抗するという外面的なことだけを問題にしているではありません。それは家庭の中でも学校でも会社でもあらゆる人間の関わりの問題なのです。

ずいぶん前に紹介した南アフリカのアルバルト・ヘイトで開った司祭マイケル・ラプスレーは、自らが紙爆弾で両手と片眼片耳を失いつつ、「記憶の癒やし」ワークショップを創設しました。南アフリカの白人と黒人の和解はもとより、世界のいろんなところに招かれて開かれます。

このワークショップに参加したある刑務所で収容された男は、こう言います、「以前は自分のことをあまり考えなかったが今は分かる。父が酔って家に帰ってきてわたしたちを殴った時に感じた怒りは、わたしがあんなにも怒り狂ってあの警官を殺したわけにつながっているということ。」——この男の父の絶望は、暴力となって息子に受け継がれた。息子はその暴力をもって問題を解決しようとする以外に手立てがあることを知らないまま成人してしまった。そして警官を殺してしまった。

迫害とは、自分の価値観に敵対する相手の精神や身体を滅ぼすことにより、問題を解決する方策だといえます。(それは、いじめからはじまるでしょう。)しかし迫害は被害者のみならず、加害者をも貶めて、暗黒に幽閉してしまう悪の力だといえます。

その闇から抜け出るために、わたしたちは、自らが弱い鳥のような存在であったことを思い起こして(29節)、髪の毛、

つまり悪の二つ二つを数え上げるような(30節)ていねいなプロセスが必要でしょう。

このワークショップでは参加者が自らに問うべき質問が用意されます：

①わたしの人生(過去10年、20年)で最もつらい経験と、最も素晴らしい経験とはどんなことだったか？

②わたしはいかに今日まで(その間)生きながらえてきたか、生きるためにどんな手立てを講じたか？

③(そのプロセスで)わたしの信仰の旅はどんなものだったか？

④わたしの国(学校、会社、…)の過去はわたしにどんな影響を及ぼしたか？

⑤わたしの親、あるいはわたしの祖父、祖母の人生はわたしにどんな影響を与えたか？

を受けて、翌日に絵を描きます。二日目に分かち合い、三日目にはパーティーを開きます。この順序は、十字架、

この質問に答えるプロセスをとおして、人は痛みを覚えます。それはあたかも慈しみと愛をもって呼びかけてくださるイエスの旅、十字架、そして復活なのです。慈しみと愛ははじめから貫かれています。しかし自分が変わることにより慈しみと愛をより深く認識できるよつに成長するでしょう。

ひとを恐れるなどという戒めは、同時に慈しみと愛の神を知れという戒めなのです。

間であると言い表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す。33 しかし、人々の前でわたしを知らないと言っている者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言つ。」